

母 校 の 思 い 出 (※1)中第 28 回卒 鎌 田 正 (※2)

母校を卒業したのが昭和 5 年 3 月であるから、あれからもう 47 年にもなるが、率直にいった母校は心のふるさととして常に私から離れることのできない存在である。その理由はと聞かれても明確に答えることはできないが、いま静かに回顧してみると、母校 5 ヶ年の生活は、血気旺盛な青春を燃焼させるに足る豊かな内容に溢れておったということができよう。現代風の単なる受験準備の学校ではなく、心身を鍛えた、理想的な学校であったと思う。

当時の母校は、創立の古い県下屈指の名門といわれ、未来に大望を抱く少年たちのあこがれの的であり、入学試験も決して容易ではなく、それだけに在校生は大きなプライドを持って、運動に学業に精進したものであった。学校の教育方針は、質実剛健、尚武の精神のもとに、虚飾がなく、暖い師弟愛の中にも信賞必罰で一貫していた。出席簿にしても五十音順ではなく成績順であり、教室の机の排列まで成績順という徹底したものであったし、女学校の運動会を覗いたとか、映画館にはいったとかで、直ちに停学処分を受けるという風であった。それでも学校を恨むということもなかったのは、師弟の暖かい人間的つながりがあり、学校生活に豊かなものがあつたからであると思う。創立記念日における原釜までのマラソンと相撲大会、意気軒昂たる弁論大会、外遊気取りで抱腹絶倒の 5 年生の修学旅行談、郡内の小学校を傘下に収めた秋期大運動会、各学期ごとに催された竜虎相撃つ武道大会、校名をかけてベストを尽くした各運動部の県下大会、山野を駆けまわった上級学年の野外演習、何一つとして思い出の種でないものはない。そこに馬陵健児の躍如たる面目があり、学校生活の楽しさがあつた。

こうした学校生活と表裏一体となって大きな役割を果たしたものとして忘れることのできないものは、上級生の下級生に対する統率であった。その風潮は、当時全国的のものであつたかも知れないが、わが母校における上級生の統率振りは、美しい伝統として継承されておつたと思う。全校生を講堂に集めて、映画を見物させてほしいといって授業を拒否したり、あるいは下級生に制裁を加えたりして、時には逸脱した行為もないではなかったが、全体として考える時、上級生の自覚ある統率は、学校行事の運営に大きく寄与したものであつた。かくてこそ全校生が学校を中心とした連帯感を持ち、根強い愛校心を持つことができたと思う。

今日の学校教育では、質実剛健の気風とか、連帯感とか、愛校心といわれるものが全国的に見て稀薄であるように思われるが、わが母校においてかかる尊いものを植えつけられた我々は幸福であつたといわなければなるまい。さればこそ我々 28 回生は卒業以来正月 3 日に同級会を続けているし、馬城会も歳々々々盛況を呈している。よき校風の今後も継承されんことを切望してやまない。

(※1) 創立 80 周年記念誌 『相中相高八十年』 (1978(昭和 53)年 5 月 7 日発行) 第四部「思い出の記」より。

(※2) 旧姓 渡部、飯豊出身

(転記&※脚注 村山)